

第2回 史跡取掛西貝塚保存活用計画策定委員会 会議録

1. 開催日時 令和4年6月17日（金）午後3時00分から5時00分まで

2. 開催場所 船橋市役所7階教育委員室

3. 出席者

（1）委 員

阿部委員長、樋泉副委員長、米田委員、秋山委員、朝倉委員、野田委員、小川委員、
今井委員、鈴木委員

（2）事務局

三澤生涯学習部長、松田文化課長、金子郷土資料館長、田久保飛ノ台史跡公園博物館
長、白井文化課長補佐、高橋埋蔵文化財調査事務所長、小中文化財保護係長、小林調
査班長、白崎副主査、松本主事、林主事

（3）オブザーバー

千葉県教育庁文化財課 松浦文化財主事、速水文化財主事

4. 欠席者 押田委員

5. 議題及び公開・非公開の別

（1）史跡取掛西貝塚の現状と課題について（公開）

（2）その他（公開）

6. 傍聴者数

0人

7. 決定事項

・史跡取掛西貝塚の現状と課題について事務局より説明し、委員より質疑及び意見交換を行った。

8. 議事

開会（15時00分）

委嘱状交付

（1）事務局説明

本日は、押田委員が欠席である旨、説明があった。

（2）会議の公開、傍聴者について

事務局より、本日の会議が公開であること、傍聴者が0名であることについて報告があった。

（3）議事1 現状と課題について

事務局から説明を行い、質疑および意見交換を行った。

事務局：

① 策定スケジュールの変更について（スライド p. 2）

第2回に予定していた「史跡の本質的価値、構成要素の整理」などの項目は、次回に変更します。ただし、令和5年度中に策定するというスケジュールに変更はありません。なお、それぞれの回の議論の内容については、委員のみなさまと協議させていただき進めていきたいと考えています。

② 保存活用計画の構成（案）について（スライド p. 3 上段）

保存活用計画は、文化庁の示す基本構成に則って作成することになっており、基本的にこのような構成となります。この委員会では、事務局案をもとに内容や文章について議論をお願いいたします。

③ 第1回 策定委員会での意見への対応状況について（スライド p. 3 下段）

過去の広報ふなばしでの掲載記録と国史跡指定答申時の紙面については、既にメールあるいは郵送で委員の皆様と共有させていただきました。

（スライド p. 4 下段）市政モニターアンケートは、結果を第3回策定委員会で報告できる見込みです。参加したい活用事業などを中心に意識調査を実施する予定で現在質問を考えています。また、ご意見のあった縄文時代や貝塚についてのイメージ調査については、時期を変えて12月くらいに実施する方向で協議中です。

（スライド p. 4 上段）学校教員へのアンケートの実施と地権者・遺跡周辺住民へのアンケートの実施については、12月に予定されております第4回の委員会で報告できるよう準備を進めています。なお質問内容につきましては、今後メール等々でご相談させていただければと思います。

（スライド p. 5 上段）アンケート結果の地域別集計について説明します。市政モニターアンケートでは市内を5つの地区に分けて集計しており、取掛西貝塚は中部と東部の境目に位置します。取掛西貝塚の認知度は中部と東部で高く地元の方々によく知られていることがうかがえます。また船橋の歴史に興味があるかという質問については、どの地区も80%ほどの方が興味があると答えており、地域ごとであり差がありません。地図の赤い円は遺跡説明板の設置個所で、青い円は指定文化財等の文化財説明板の設置個所です。各地域とも説明板が設置されている状況です。

④ 関連する遺跡について

A. 縄文時代の概要

（スライド p. 5 下段）こちらに市内の縄文時代の貝塚、貝層を検出した遺跡を時期ごとに示しました。縄文時代早期前葉は市内の真ん中にある取掛西貝塚が唯一です。早期後葉も飛ノ台貝塚くらいしかございません。前期・中期になりますと、少し広がって市内各地に貝塚が形成されます。後期になるとかなり少なくなります。宮本台貝塚、古作貝塚があります。主に東京湾に面した区域に貝塚は分布しております。

（スライド p. 6 上段）次の図は、取掛西貝塚周辺の縄文時代の遺跡の状況を示したものです。赤が早期、黄が前期、緑が中期、青が後期です。ここに示す地形は現代のものですが、海進の最盛期をイメージできるように標高4mまで水面の表示としています。

早期前葉の貝塚は取掛西貝塚だけです。早期前葉の遺跡としては、中野木の新山遺跡でまとまって土器がでております。早期後葉になると遺跡が増えてきて、飛ノ台貝塚や東中山台遺跡群などがあります。縄文時代前期になりますと、取掛西貝塚、八栄北遺跡、前貝塚掘込貝塚、藤原北遺跡など、遺跡が広がってきます。縄文時代中期になると、ついじ台貝塚、前貝塚、中法伝貝塚などがあります。縄文時代後期になると古作貝塚と宮本台貝塚の2か所くらいしかなく、かなり少なくなります。

B. 主要な縄文時代の遺跡

a. 飛ノ台貝塚（スライド p. 6 下段～p. 7）

早期の後葉では飛ノ台貝塚があげられます。現在市の指定史跡となっております。東京湾岸地域を代表するような大きな貝塚・集落跡です。考古学上で炉穴が初めて発見された遺跡であり、博物館にも展示がされていますが合葬人骨が発掘されています。飛ノ台貝塚では貝類のほか、魚類や動物の種類が多いというのが特徴的です。早期後葉の貝塚では魚骨や獣骨が出土することは少なく、資料が豊富な重要な遺跡です。

b. 飯山満東遺跡（スライド p. 8～9）

前期では飯山満東遺跡があげられます。取掛西貝塚の北東に位置する遺跡で、今から6千年くらい前の住居の中に小規模な貝層が見つかっています。この遺跡で有名なのは、墓と考えられるピットとよばれる穴がたくさんできたことです。住居から出土した土器はこのような深鉢ですが、ピット群出土土器は浅鉢など特殊な形の土器でお墓の副葬品ではないかと考えられています。このような玉類も出土しています。

c. 高根木戸遺跡（スライド p. 10～11）

高根木戸遺跡は西習志野にあり、現在は高郷小学校が建っています。発掘調査が行われた頃は台地全面を発掘調査することが日本全国でも少なく、全面発掘で遺跡の構造がよくわかったということで古くから有名な遺跡です。中央に広場があり、それを取り囲むように住居跡が分布する環状集落です。こちらでも住居跡の中に貝層が入っています。装飾品なども出土しております。犬が3頭くらいまとめて埋葬されていたということでも有名な遺跡です。

d. 海老ケ作貝塚（スライド p. 12）

海老ケ作貝塚は、今から4000年から5000年くらい前の遺跡です。赤で示しているのが竪穴住居跡、青で示しているのが貝層範囲、緑で示しているのが貯蔵穴等の小竪穴の分布です。浅い谷をはさんで北側に海老ケ作北遺跡、南側に海老ケ作貝塚と二つの関連する遺跡が分布しています。竪穴住居が環状の分布となる遺跡で、大部分が宅地になってはいますが、大きな貝層が近隣公園の中に取り込まれて保存されていますので看板などを設置して周知していればと考えております。平成26年に調査されないまま開発工事で一部が壊されてしまいました。船橋市では痛恨の出来事で、それを起点として保存に力を入れているところです。

現在は国と県の補助金もいただきながら、総括的な報告書を作成するために何年もかけて整理を行っております。そのような成果がまとまった時点で、公園を中心に市の指定にしたいという考えはあります。

近年では、戸建て住宅の建て替え等で発掘調査を行いました。公園についても照明灯や入口を作る際には一部調査をしています。遺跡を残せる所は保存する形で公園の整備をしています。こちらの写真で白く見える部分が大きな貝層で、幸いにもよく残っていますので、市

史跡に指定して未来に残していきたいと考えています。

e. 古作貝塚（スライド p. 13 上段）

古作貝塚は縄文時代後期中心の貝塚で、現在は中山競馬場になっています。この遺跡で一番有名なのが、貝輪が入った壺型土器です。現在は東京大学総合博物館にあり、飛ノ台史跡公園博物館にレプリカがあります。全国的に見ても珍しい土器です。

また埋葬人骨がかなり出ており、縄文時代の葬制を考える上で重要な遺跡です。今、競馬場の中のけやき公苑に JRA が古作貝塚の説明板を建てており、競馬がない日であれば自由に入って見ることができます（開催日は有料）。

f. 宮本台遺跡群（宮本台貝塚）（スライド p. 13 下段）

宮本台貝塚を含む宮本台遺跡群は、JR 東船橋駅周辺に広がっている遺跡です。一番有名なのが、写真で示した何体も集積した特殊な埋葬です。

C. 弥生時代以降

（スライド p. 14 上段）今、縄文時代までの遺跡を見てきましたが、船橋市には弥生時代以降も連綿と貝塚があります。貝層の検出地点を示した図がこのようなものです。縄文時代は海に面した小河川周辺に分布していましたが、弥生時代になると海に近い狭い範囲で出ています。弥生時代の貝層は船橋駅北側の夏見で 2 か所みつかっています。1 か所は樋泉先生に分析いただいて報告書がでています。もう 1 か所はこれから整理を行う予定です。

古代以降も、古墳時代、奈良時代、平安時代の堅穴住居からも貝層が見つかっており、紫色で示しております。中世になりますと、船橋市西部の東中山周辺や西船橋周辺の東中山台遺跡群、印内台遺跡群に集中して出てきています。近世になりますと、東中山と印内台で一か所ずつ見つかっております。遺跡として追えるのは江戸時代までなのですが、船橋は「御菜浦」という将軍家に魚介をおさめる特権をもつ漁師町となっており、遺跡としては見つかりませんが、船橋は間違いなく、江戸時代まで漁業等で発展してきた町と言えます。

（スライド p. 14 下段）左は古墳時代後期の堅穴住居跡の中の貝層です。右は、中世の 15～16 世紀くらいの井戸跡に入っている貝層です。（スライド p. 15 上段）こちらは古墳時代の住居跡の図面で、住居跡がある程度埋まって窪地になったところに貝層が形成されています。窪地の中央に牛の頭骨があり、ここには図面としてだしていませんが、ト骨・占甲がかなり大量にでています。ト甲はウミガメを用いた占いで、周辺では三浦半島で多くでています。

（スライド p. 15 下段）次の図は中世の土坑墓で、貝殻で埋めている珍しいものです。

古代以降の貝層が出るのは、東京湾岸沿いの夏見、海神、印内、東中山のあたりで、図（スライド p. 16 上段）に示すように、古代では集落跡が集中しているところです。

（スライド p. 16 下段～p. 17）12 世紀（中世）になりますと、伊勢神宮の荘園である、船橋御厨（夏見御厨）が成立します。納める布等は港から伊勢神宮へ運ばれていたと思われます。

中世の貝層があるのは東中山や印内の地域です。海老川の河口あたりに港があったと言われておりまして、港そのものの遺跡は見つかりませんが、周辺地域で埋蔵銭が見つかりしております。港を中心として、海老川河口あたりに都市的な場があったのではないかと考えられます。（スライド p. 18～p. 19 上段）江戸時代になりますと、海老川の河口あたりに船橋御殿が作られ、海の交通と街道の結節点として発達していったと考えられます。

D. 活用のイメージ

(スライド p. 19 下段) 活用のイメージとしましては、取掛西貝塚が核となり、他の縄文時代の貝塚や遺跡、さらに広げて古代から現代までの貝塚や遺跡、文化財、歴史などを合わせて活用していきたいと考えております。縄文時代から始まって、古代、中世、江戸時代、それ以降の海に関わる文化財が船橋にはあります。

(スライド p. 20 上段) こちらのスライドに指定文化財に関わるものを挙げています。海老川河口のすぐ近くの高台にある船橋大神宮（大富比神社）の灯明台。明治時代につくられたもので、航海の目印になっていました。船橋大神宮の神楽。船橋港では、決まった日に船の上で神楽を舞って、沖の方へ行って五穀を蒔いて豊穰を祈る神事を行う水神祭といったものも伝わっています。御菜浦関係では船橋浦漁業関係古文書類が残されています。高潮等で溺死した漁師等を供養する大仏追善供養という民俗行事も本町周辺で行われています。三田浜塩田発祥の地の碑や塩田の堤など、古い船橋の海岸線を感じられるような文化財が湊町周辺に残っております。

(スライド p. 20 下段) こちらのスライドは、遺跡から出てきた鏡です。俵藤太鏡といって、藤原秀郷が竜宮にいて、使っても使っても減らない米俵をもらってきたという海神信仰のモチーフの鏡です。(スライド p. 21 上段) 次のスライドは活用のイメージをまとめた図ですが、海と船橋の歴史ということで取掛西貝塚を核として、色々な活用を考えていければと思っています。

⑤ 取掛西貝塚の調査成果

(スライド p. 21 下段～p. 22 上段) 取掛西貝塚は、今から約 1 万年前と 6 千年前の縄文時代集落のほか、弥生時代中期の集落跡などが出ている遺跡です。今現在は東京湾沿岸から約 3.5 キロメートルの位置にありますけれども、1 万年前は海が遠く、三番瀬海浜公園のあたりまでと考えられています。

(スライド p. 22 下段) 取掛西貝塚は、東京湾東岸部のなかで最古の貝塚を伴う集落跡で、地域における貝塚開始期の状況を知る上で重要です。関東地方では、東京湾の入り口にある夏島貝塚や平坂貝塚が知られていますが、本貝塚は東京湾奥部ではじめて見つかった貝塚で、多数の住居跡が検出されていることから集落と貝塚の関係がわかる遺跡として重要です。

(スライド p. 23 上段) 3 年間に及ぶ発掘調査の結果、出土した土器の特徴・組み合わせ、住居跡の重なりなどから約 1 万年前の集落が 3 時期に分けられ、時期が下るごとに集落の分布が西から東に遷移することが確認されました。撚糸文系土器といい、大体 11,500 年前から 10,000 年ほど前の幅の土器形式なのですが、その最後の時期の型式のものでよくまとまって集落跡が形成されています。¹⁴C 年代測定も何点か行っており、土器からみた変遷を補強する結果が得られています。ただし最後の時期については良好な年代値が得られず、早期前葉集落がいつからいつまでなのか、実年代は押さえきれっていません。今後、土器型式を詳細に検討し、連続的にどこまで集落が形成されているのか、考古学的に詰めていきたいと考えています。

早期の貝層が形成されたのは 3 つの時期のなかの 2 番目の時期で、この時期に貝層が出てきた時期が限定されます。集落のはじまりも貝層はありません。

5 次調査地点で見つかった貝層は 70 cm くらいの厚さですが、土器型式からみるとかなり短期間につくられた貝塚なのではないかと思っています。

阿部委員長：横須賀市に夏島貝塚があります。あれは、非常に古い時期の貝塚で、取掛西貝塚とほぼ同じか少し古い時期のものになるのですが、貝塚の一番底の方にあるのはヤマトシジミなのです。古い時期の貝塚にはヤマトシジミが多くて、瀬戸内海の島の上にも古い時期の貝塚がありますが、基本的にヤマトシジミなのです。氷期が終わって海が入り込んできたから貝塚ができたという教科書的な理解では説明できないような、はじめは汽水に適応していることが分かってきたということも重要です。なぜあんなにシジミを好んで食べたかということも素朴な疑問であるけれども、その疑問に僕はまだ答えられないのです。樋泉先生や米田先生も疑問に思っている、「なぜそうなるのだろうか？」という問い、それが取掛西貝塚の最大の魅力です。

樋泉副委員長：2万年くらい前までが、氷期という海の海面レベルが100メートルくらい低い時代でした。その時代には東京湾はなく大きな谷のようになっていたのですが、その後気候が温暖化して海面がぐっと高くなって、その氷期の谷の所に海水が入り込んでいった最初の状況が取掛西貝塚の当時の状況です。元々ここは谷だったのですが、そこに海水が入ってきたのです。ヤマトシジミという貝は、淡水でも海水でもない河口のような場所、淡水と海水が混じりあった場所で大繁殖する貝なのです。海が入ってくるまでは、川が流れているので淡水ですが、そこに海水が入ってくると川の水と海の水が混じる場所になります。そこに真っ先に繁殖するのがこのヤマトシジミです。夏島貝塚は、カキが多い貝塚ですが、カキは海の貝ですので、谷に海水が入ってくるとヤマトシジミは少なくなって、海の貝が増えていくことになります。ですからヤマトシジミの貝塚というのは、古い時期に海が入ってきて、海水と淡水がぶつかった瞬間にヤマトシジミが生息するので、その瞬間を捉えた貝塚といえます。これが取掛西貝塚で、日本国内を見ても珍しいのですが、世界的に見ても珍しい場所であり、世界的にもあまりこのような例がないのです。氷期が終わって谷に海が入ってきて、初めて人類が海の環境とファーストコンタクトした時に、早くもその環境に適応し、貝を日常的な食べ物に取り入れて食べていたということは、日本の縄文時代だけでなく、世界的に見ても興味深い重要な例です。

秋山委員：先ほどの現地視察の時にこの川の調査もするべきだと言っていましたけれども、あの意見もこういうことなのですか？

樋泉副委員長：あの意見については、もう少し新しい時代になってから海水がもっと谷の奥まで入っていくのですが、飯山満川という所に当時の貝が繁殖して貝殻が化石としてあるのではないかとことです。

朝倉委員：汽水があった時期から完全に海水に変わるまでの期間は何年くらいなのですか？

樋泉副委員長：(スライド p. 23 下段) まず、取掛西貝塚の早期の貝塚はおおよそ1万年前で、その頃の海の海面はおおよそマイナス50メートル。それが7千年前には、現在よりも少し高いプラス3メートルくらいになります。4千年間に50メートル以上海面が上がっており、そのため取掛西貝塚の古い貝塚は、氷期の谷に最初に海が入ってきたその瞬間です。その後、取掛西貝塚では6千年前くらいの縄文時代前期の貝塚ができます。その時期の気候は今より温暖化していますので、海面も今よりも少し高くなっていました。本日現地視察でみなさんに見ていただいた谷があったと思いますが、その谷の中まで海になっていたのです。その時代の取掛西貝塚は、一転して海に囲まれた岬のようになります。同じ遺跡の中で、まだ海をはるか遠く今よりも海面が50メートルくらいも低い時期と、海面が今よりも少し高くなって谷のずっと奥まで海が入っている時期という両極端な環境を確認することができます。

今の我々のイメージと全く違う環境の中で生活をしていたのです。

米田委員：私は人類学という、もう少し長いスパンで人類の進化の研究なども行っていますが、海の資源を利用するというのは実はホモ・サピエンスにほぼ特有でして、ホモ・サピエンスに一番近いネアンデルタール人は、海の資源を利用する証拠はほとんどありません。ホモ・サピエンスでも 20 万年の歴史の中で海の資源を利用したのは、一番古くて 8 万年くらい前のアフリカであるとされており、ホモ・サピエンスが生き残ってネアンデルタール人が絶滅したというのは、ホモ・サピエンスが色々な資源を利用できたからだろうと言われています。では海の資源はいつから利用されたのかというのは、人類の進化の研究ですごく重要なテーマで、海の資源を利用したからホモ・サピエンスがこれほど世界中に拡散できたのではないかという仮説もあります。陸の資源の場合、場所によって動物も植物も違うので、それらを新しく採る方法を開発しなければならず大変難しいのですが、海の資源であれば別の場所でも同じような方法で資源を採ることができます。日本の貝塚研究ではこのような視点があまり議論されないのですが、海との関わり方というのはすごく重要なことです。1 万年前よりも古い海との関わり方を示す証拠というのは本当になく、世界中でも数か所に限られているので、取掛西貝塚からホモ・サピエンスの海との関わり方がわかるかもしれないというのはすごく大切なポイントです。ただ、一方で人類学の視点から見ると貝はエネルギーがとても少なく、貝を利用するというのはきわめて効率が悪いことなので、貝殻を捨ててくれればよいのかもしれませんが、あるいは無駄なことにも何か意味があるのかもしれません。

樋泉副委員長：ちなみにこの時代の海岸線は三番瀬の海浜公園くらいです。三番瀬海浜公園から取掛西貝塚までは、何キロくらいですか？

事務局：およそ 5 キロくらいです。

樋泉副委員長：いまの三番瀬あたりの場所で採ったシジミをおそらく、かごか何かにいれて延々と海老川をさかのぼって持ってくる。確かに効率の悪いことをしていると思いますけれども、そこにどんな意味を見出していたのかは疑問です。

米田委員：おそらくエネルギー収支としてはマイナス。そんなことをする生物は絶滅するはずです。だから貝塚は不思議だと思っています。

樋泉副委員長：そういう意味では、確かにものすごく効率の悪いことをやっている。それだけ何かあったのではないか。

朝倉委員：ひとつひとつは小さいけれど、沢山採れるということはあるですか？

樋泉副委員長：それはあります。ものすごく、沢山採れる。

阿部委員長：シジミが沢山ありますが、当時の人は貝ばかりを食べていたわけではありません。取掛西貝塚は人骨が出土していませんが、人骨が出ている遺跡では、米田先生が専門の人骨自体の安定同位体分析をして、その人物が何をどれくらいの割合で食べていたかを調べる研究が進んでいます。その研究の結果、貝ばかりを食べている縄文人はほとんどいないことが分かってきました。取掛西貝塚を残した当時の人々は、貝以外の何を利用していたかということはまだ全く分かっていません。このあたりが、活用も含めてどう研究していくかということになると思います。これについても非常に重要なポイントなのですが、貝以外の何を利用していたかという点を切り口にして、どのような生活史があるかという視点で議論することが重要です。その議論ができる遺跡であると思います。貝塚がなくなった時期の取掛西貝塚の人々の生活はどうであったかということ、研究していかなければいけないのです。

米田委員：出土した土器の型式は限定的で時期が限られているという話がありましたが、早期

の一つの土器の型式の時間を考えると、早期の取掛西貝塚の実年代は相当長い可能性があるのではないのでしょうか。

樋泉副委員長：結局、早期の取掛西貝塚の実年代は絞りこめなかったのですよね。土器形式的には絶対に時期が分かれるのですが、測定結果の年代は順序こそ矛盾しないものの、かなりの部分が重なってしまい明確な年代差は出せなかった。

米田委員：どのくらいの期間で取掛西貝塚が形成されたかが研究できるとよいと思います。

樋泉副委員長：この時期は海面が上がり始める時期で、この後シジミが生息する間もなく海面が上昇するというのはちょっと極端ですが、おそらくあまりたくさん貝がとれるような環境ではなくなる。そのような時期その瞬間にヤマトシジミが繁殖したと想像しています。こちらの図（スライド p. 23 下段 左図）が1万年前、海面が上がりはじめた時期です。最初にシジミが繁殖し、わざわざ5kmくらい先の海まで貝を取りに行く期間があります。この後、海面が一気に上がっていくので取掛西貝塚の目の前が海となります。こちら（スライド p. 23 下段 右図）が6千年前で、干潟で潮干狩りするような貝をとっています。同じ場所ですが、1万年前と6千年前とでは環境は別世界なのです。

米田委員：ある特定の貝や食材を追い求めて人が居住地を移すのではなく、周りにあるものを使ってその場所に住み続けるという縄文人の特徴がよく表れた遺跡なので、この観点から話ができるれば取掛西貝塚の面白さを説明できるのではないかと思います。

朝倉委員：道具が使えたから定住ができたのですか？

樋泉副委員長：貝を採るのにあまり難しい道具は必要ありません。ザルがなくても素手で貝を採ることはできます。カキを取る場合は素手だと手を切ってしまうため、何かで叩き割るか棒などを使った方がよいですが。

朝倉委員：すごく大きな話でいうと、一人の発明ではなく先祖代々の知恵の蓄積があったからこそ、世代を超えて周辺の環境をよく理解し活用し続けることができたのですよね。人以外の動物は言葉で上手に伝えることができないので、遺伝子に刻まれる本能がないと周辺の環境を活用することができない。環境が変わるのが早い場合は、環境を追いかけて移動するしかなかったのかもしれないですね。試行錯誤したことが世代を超えて、集落も超えて、知恵として蓄積していったために、この新しい環境にすぐに適応することができたのだと思います。

米田委員：あとは、1万年よりも古い氷期といわれる時代は気候がすごく不安定なのですよね。千年単位くらいでものすごく気候が暑くなったり寒くなったりしていて、その環境に人間がすぐ適応することが難しいため、定住的な生活をしていたという例はとても少ない。ところが1万年前くらいからは、1か所で数百年、場合によっては千年くらい住み続けるという定住的な生活が始まります。気候が安定してきた完新世という時代になって世界中で定住が始まり、定住がはじまると場所によっては農耕に移行していきます。しかし縄文時代にはあまり農耕的なものはなく、自然の資源をうまく使い続けて色々な場所で、暮らし方を変えて暮らしていくというイメージがあります。これが典型的な縄文人の生活様式としてみえる特徴かと思います。

樋泉副委員長：取掛西貝塚の形成時期は、完新世という暖かい安定した時代に入って間もない時期なのです。千数百年。そのくらいの間にもう、自然の資源を活用しながら場所によって暮らし方を変えていくようなライフスタイルになり、新しい環境に適応した。取掛西貝塚はその時代の人の生活の様子がよくわかります。

米田委員：多くの人間が定住し始めると、積極的に環境を維持するような働きかけをするよう

になり、環境に手をかけていくことになります。人間がものすごく環境に負荷をかけて、現代において大変なことになっているその始まりはこの頃だろうと考えられています。我々がエデンの園の林檎をかじってしまった最初の頃といいますか、そういった話を教育の話に結びつける。人新世について議論しようとする、地質環境に影響を与えた痕跡が残っている10,000年くらい前のこの取掛西貝塚の時代を人新世の始まりという人が結構います。定住し始めて環境に積極的に手を加えていったから暮らし続けることができた。もう少し後になると、貝が沢山採れるように環境に手を加えたのではないかとといった議論もできるかと思います。

阿部委員長：船橋には色々な時期の貝塚があることを説明いただいたので整理すると、重要なのはホモ・サピエンスの定住的な生活の開始が取掛西貝塚から分かるということです。定住的な生活がこの時期どこでも同じように起きているわけではないことも取掛西貝塚の重要性で、定住的な生活の開始がわかる貝塚は東京湾岸では取掛西貝塚しかありません。

樋泉副委員長：日本中でもこの時期の貝塚は他にほとんどない。

阿部委員長：あと住居の数もないです。あの場所に特定の集団が長期間存在したことは事実だが、他の場所では、閑古鳥のように人がいないという状態から定住が始まっているということも重要です。

米田委員：そういう意味では取掛西貝塚は特別な場所です。

樋泉副委員長：人類史のスケールで話すこともできますし、取掛西貝塚を起点にその後の船橋と海の歴史に話を持っていくこともできますね。

米田委員：今話したのは、縄文時代の文化というのが、ホモ・サピエンスの歴史の中で変わっていて面白いですよということです。

樋泉副委員長：そのためのコンテンツとしても使えます。

米田委員：縄文時代のなかでの位置づけもできる。

樋泉副委員長：船橋に海がやってきた最初の場所としての貝塚としても位置づけられる。

阿部委員長：それでは、スライドの続きをお願いします。

事務局：(スライド p. 24 上段) 貝層を取り除いた下に、イノシシやシカの骨が4体並べられているような状態で出てきおり、周辺が周りの火を受けて焼けていました。骨や角の一部も火を受けて変色していますので、おそらくこの状態で火を受けたということが推測され、なかなか類を見ない特殊な出方をしています。また、頭の骨が非常に多い特徴があります。右の配置図は位置関係を捉えやすくするために模式的に示したものです。

阿部委員長：貝だけではなくて、動物も資源として利用していたということが分かりますね。

樋泉副委員長：これは少し奇妙な出方なので、単に生ごみを捨てたというのではなく、特別な扱いをしています。現在、詳しい出土状況について確認中です。

事務局：(スライド p. 24 下段) 取掛西貝塚では、イノシシ・シカ・タヌキなど非常にバラエティーに富んだ種類の動物の骨が見つかっております。

樋泉副委員長：キジなど鳥もたくさんでています。これらの動物は食べていたと思います。もちろん、小さいものは食べるだけでないものもあります。

事務局：貝は汽水域のヤマトシジミが出ていますが、魚は淡水のコイや沿岸の魚から回遊的なイワシの仲間などが出ており、かなり幅広い環境で漁労をしていたことが分かっております。植物利用の方は、炭化した種実や土器に残された圧痕の両方を調べました。縄文時代に見られるようなマメ類、ミズキなど何種類かの植物が早期の段階から利用されていたことが分か

っています。

(スライド p. 25 上段) あとは、貝層中からツノガイを輪切りにしたビーズが見つかっておりまして、2000点以上見つかっております。製品にきちんと加工されたものや加工途中と思われるもの、材料に近いものも含んでいますので、取掛西貝塚で加工して作っていたのではないかと考えています。何点か年代測定を行った結果、化石化したツノガイを持ってきて材料にして使っていたということが分かっています。

樋泉副委員長：ツノガイというのは、二枚貝でも巻貝でもない角のような形をした、太さが数ミリくらいの非常に細く5センチの長さの貝です。普段は深いところにいて稀に打ちあがることもあるのですが、食用にはあまり向いていない。ビーズを作る素材としては、縄文人は非常に好んで使っているのです。ものすごく小さい貝で、このきれいな形、しかも一定の大きさに仕上げるというのは大変ですね。ツノガイという手に入りにくいものをあえて使っているのです。ツノガイ化石を採取したであろう木下貝層は、下総台地から茨城の霞ヶ浦、あと三浦半島にもあります。ツノガイは、縄文人が一番古い時代から各時代を通して非常に好む貝ですね。タカラガイ・イモガイとツノガイが縄文時代の装飾品の材料として好まれています。タカラガイは取掛西貝塚でも出ています。タカラガイ・イモガイは南の貝で、現在の東京湾の中にはいません。黒潮のあたる海岸、房総の外海であれば採集することができます。縄文時代だからと言ってみんな自給自足で自己完結しているかといえばそうではなくて、この時代に長野県のかかなり深い山の奥までツノガイが持ち込まれている事例もあります。

オブザーバー（松浦主事）：化石を使った装飾品はツノガイだけですか？

樋泉副委員長：タカラガイやイモガイは海岸で拾えますが、ツノガイは拾うのは大変です。それで化石なのかと思います。それと化石の方が大きいものが手に入ります。

事務局：(スライド p. 25 下段) 他の時代では2100年くらい前の弥生時代中期の竪穴住居や、土器が集中して出てくるような土坑も見つかっております。弥生時代中期の集落跡は船橋市内では初めて見つかりました。同様に研究が必要かと考えております。

(スライド p. 26 上段) 弥生時代中期の主な集落跡の分布図ですけれども、船橋は少ないということが分かります。遺跡の説明としては以上です。

⑥ 保存管理・整備・活用の現状と課題について (スライド p. 26 下段～p. 27)

事務局：こちらに課題をいくつか挙げております。現在遺跡の半分近くが未指定でありますので、今後地権者の方々にご説明を行ったうえで、ご理解いただけたところから史跡指定地を拡大していきたいと考えております。遺跡を守るための現状変更の取扱いについては、どのようにすれば遺跡が守れるかということ、実際にお住いの方や土地をお持ちの方がわかるように保存活用計画で示していきたいと考えております。また営農地についても、今作っている作物は遺跡に影響はないのですが、耕耘機を更新する際に遺跡に影響がでない機種を選択いただいた結果、耕作の方法が変わって苦労しているという話も伺っております。ハウスの更新も難しいのではないかと不安の声もあがっています。すぐ近くまで住宅地があるので、見学等で史跡を訪れる方もおり、現地にお住いの方の住宅地としての空間や生活環境と史跡の調和をはかる形で活用できればとも考えております。また畑については、現在作物を作っていない休耕地も増え、地権者の高齢化も進んでおりますので、雑草の多い休耕地の増加傾向がある中で今後遺跡の管理をどうするかということも課題です。道端への不法投棄対策など、景観を維持することも課題です。一部の地点では雑木が繁茂し、背の高いトラックだと

接触するような状況です。周辺の斜面地についても土砂災害警戒区域となっており、遺跡を保存するうえで崩落等を最小限にする管理の仕方を考えていかなければならないと考えております。切通しでは鋼板が老朽化しており、大雨時の崩落対策、点在する公有地の雑草管理、現地にある石造物の取扱いについても考えていかなければならないと思います。

整備につきましては、現地視察で見ていただいた分室は常時建物に人がいないため開放することができません。一方で遺跡周辺には見学に訪れた方が使える駐車場やトイレがなく、取掛西貝塚に訪れた方向けのガイダンス施設もないため、これらの設置をどうするかについても考えなければなりません。遺跡の内容が分かるような設備が少ないため、説明板を大きくするなど遺跡の価値が伝わるような活用の検討をしていかなければならないと考えております。浅いところでは遺跡が30cm位の深さで出てくるため、将来公園として整備するには盛土等をする必要があります。雨水の処理や斜面の整備など物理的な課題も生じてきます。現地には、現在公開できるものがないので誘導サインはありませんが、将来的には設置の検討が必要です。知らないで現地に行こうとするとなかなか辿り着かない場所ですので、誘導サインの設置も考えていきたいと思います。

活用については、学校教育と連携した学習機会の充実、地域住民など市民が参加できる活用の検討を考えています。また整備がすぐにできない中で、現地で史跡の価値を知ることができる活用を考えていく必要があります。調査研究や普及事業の継続的な実施、関係機関との連携では、市内の博物館等だけでなく周辺自治体とも連携できる仕組みの構築なども課題となっていくのだろうと考えております。説明としては以上です。

(意見)

阿部委員長：アンケートを見ると「取掛西貝塚を知っているか」という質問があつて、非常に認知度が低い。それに対して下の段の「船橋の歴史に興味があるか」ということに関しては、比較的多くの方が興味を持っています。この差をどうしたら解決できるかということが重要な課題になると思います。船橋の歴史の中に、まだ取掛西貝塚が明確に位置づけられていない。これを一般の人たちや学校教育の中でどう定着させていくかということにおいて、このデータは非常に有用なデータだと思います。

朝倉委員：現地の説明板にはツノガイの話などが唐突に書いてある。そうではなくて、謎と答えのような提示の仕方をしていけば、お子様や実際ご覧になった方が、「だからこういうことがわかるのか」という話につながる。そういった部分に工夫が必要と感じました。

阿部委員長：昨日、私の研究室の大学院生たちとこういう遺跡を活用するにはどうしたらよいかという話をしました。考古学専攻生なので、やはり博物館に行って興味を持つのが最初なのです。どうしたらよいか、何か提言はないかと聞いたところ、展示の仕方で土器や石器を展示ケースに設置し、その近くの壁面に縄文時代の暮らしの簡単な説明文やイラストを掲示することが定番だけれども、その展示の仕方だと展示してある資料とイラストを繋ぐものがない点が残念だという意見が出て、土器のかげらから何が分かるのか、展示品からわかったことで当時の暮らしに対してどんなイメージが膨らむのか、展示品から縄文時代の暮らしなどを推測できる可能性を説明する博物館があれば面白いという話になりました。これは考古学の世界だけでは難しく、様々な関連科学と共同することによって一つ一つの問いに答えていくことができる。だからこれも教育の中に入れて議論していけば、歴史学の中だけで取掛西貝塚を捉えるのではなく科学全体できちんと位置づけようという問題意識を共有で

きるようになり、非常に面白いと思います。教育という分野で切り取るのではなくて、全体の中で教育を位置付けるというスタンスがとればよいと思います。

秋山委員：大事なことは、まず船橋の歴史がどのように流れてきたかということ、考古学的なことだけではなく地形の変化もあわせて見ていくことだと思います。どのような地形があって現代までどのように変化していったのかという視点でみると、歴史は全く違って見えまじ、重要な点が繋がってきます。地形が非常に大きな要素を持っていると思いました。もう少しこの辺をうまくやるとよいのではないのでしょうか。

阿部委員長：環境というキーワードがそうですね。取掛西貝塚は数千年にわたる遺跡なので、環境の変動が非常に顕著なのです。それを活かして、静止画のように1万年前の生活がこうだった、6千年前の生活がこうだったという説明で止めてしまうのではなく、1万年前から6千年前までの間に地形や環境や人間活動を含めて何が変化したのかということ、議論の切り口として用意していくことが出来ればよいと思いますし、最終的に町づくりというところまで話が発展するのではないのでしょうか。

オブザーバー（松浦主事）：私は西部地区に住んで子育てをしている一市民でもあります、なかなか子育ての場では取掛西貝塚が話題に出てくることはありません。教育の場では校外学習やイベントなどが出てくると思います。今後、子どもたちに親しみやすいようなキャラクターを作ることまでとはいかないかもしれませんが、子どものレベルで取掛西貝塚に少しでも親しみを持ってもらえると、取掛西貝塚を知った子どもがやがて大人になり、地域全体に取掛西貝塚が認知されていくような流れが出来るのではないかと思います。そういったところを踏まえて考えていただけるとよいと思います。ツノガイがすぐに手に入るかどうかはわかりませんが、例えばツノガイのビーズ作りの体験などができるようになれば、そんなものがあるのだと面白く感じられるのではと思います。

阿部委員長：解説板もよいが、もっとハードルを下げた低い目線で説明ができるようなところがあるとよいですね。

米田委員：現地を活用するのはまだかなり敷居が高くて、名前をきいたから見に行ってみようといっても、どこをみても縄文時代を感じさせるものはほぼ何もないので、現地の活用はもう少し先の長い計画で考えた方がよいのではないかと思います。歴史を好きな方であれば、勉強しようと思えばまず博物館に行ったりすると思いますが、たとえば市の博物館に取掛西貝塚のコーナーを作ってもらい、まずは名前を知ってもらって、こういうものがあるのだと認知してもらおうというのが、市内で調整して最初にやれることだと思います。それをやる時に、できればさっき阿部先生がおっしゃったように、過去に発見された色々な遺跡から得られた情報を盛り込んだ復元図を1枚作り、その中に描かれた土器は、実はこういうことをやって、こういう発見があったからこういう復元図ができたのだというような、担当の専門家が話すようなビハインドストーリーの動画をどこかで公開するようなことができれば、遺跡の本質や活用に向けた第一歩となり、全体像ができるのではないかと思います。復元図は専門のイラストレーターの方に頼むと予算的な措置がいろいろあると思いますので、遺跡の本質がわかるようなイラストを1枚作ることを目標に、それを市民の方が触れられる場所に恒常的な展示として出来るとよいのではないかと思います。

阿部委員長：その復元図がどんどん変わっていくという形で出来たらよいと思います。

秋山委員：小学校の低学年で触れることができると、あれはすごかったと子どもに印象が残る。

阿部委員長：博物館の一角ということであれば、船橋には「飛ノ台史跡公園博物館」という縄

文時代早期の博物館がありますし、三番瀬には「ふなばし三番瀬環境学習館」がありますので、今の海の資源を体系的に教えることができると思います。ヤマトシジミはいないかもしれませんが、カキなど生きている状態を観察できるので、そういうものを連鎖させて複合的に船橋と海の関係を考えることもできます。取掛西貝塚だけではなくて、今ある施設を有効に活用しながらネタをためておいて、何十年か先に博物館や取掛西貝塚の整備が具体化するときにそれを生かすことができるようにするための準備は早い方がよいでしょう。すぐにやったらよいのではないかと思います。

秋山委員：近隣には加曽利貝塚もあるので、そういうところと連携することを考えていくとよいでしょう。

阿部委員長：貝塚とは何かというのは、素朴な疑問なのだけれども本当に難しい。貝だけ食べていた人はいないということがわかってきて、貝の他に何を食べていたのかという議論がやっとできるようになってきた。そういう視点で捉えると、船橋市には色々な時期の貝塚があるので、海の資源の利用の仕方や海の資源の重要度がおそらく時期によってそれぞれ異なるはずです。時期による違いを一つの地域で検討できる強みがあると思います。

小川委員：それについて、思ったことがあります。海が近いから貝を食べていると普通の人は考えますが、さきほどの説明では海から遠くてもわざわざ貝を取りに行っている。どうしてかというのは、単純に美味しいからじゃないのか。なぜ美味しいかという、縄文土器があるから煮炊きでき、他の食材とスープにできる。味が混ざると美味しいということがわかっている。あるいは貝で出汁をとる。単純にわれわれが思っている以上に縄文人はグルメだったのではないかという視点でみると、それだけ苦労して取りに行く、おいしいから取りに行く。単純にそれを食べないと生活できないということではなくて、われわれがスパイスを求めて遠くまで行くような、そういう行動原理が縄文人にもあったのではないのでしょうか。

阿部委員長：塩であってもそうだし、貝であっても、さまざまな嗜好品といわれるようなものの利用が始まるのが縄文時代です。

小川委員：我々よりも昔の時代だから、縄文人はギリギリの生活をしていてと想像してしまいやすいですが、科学技術がないだけで、思っていることやしたいことは我々とほぼ変わらない。だから我々が思っているよりも縄文人には心の余裕があったのかもしれませんが。先程のツノガイの装飾品も、そんな物を作っている暇があったら食べ物を探した方がよいはず。それでも装飾品を作るということは、それだけ心に余裕があつてということで、豊かな時代だったということの証明でもあると思います。

樋泉副委員長：取掛西貝塚でははっきりとしませんが、加曽利貝塚などの大きい貝塚では、貝を選び好みしていたようです。ハマグリはおいしいから食べるけどアサリはいらないといったことが、貝塚を分析すると結構見えてくるのです。縄文人だから何でも好き嫌いせずに食べるかということ実はそうでもない。

米田委員：逆にイボキサゴなんかを拘って沢山採っていたりする。それは出汁だったのではないかとわれています。

樋泉副委員長：単純におなかが減ったから近くの貝を食べたという話にはなりませんね。

秋山委員：米田先生の研究室で、今私が研究している大湯の環状列石について分析をしています。大湯の環状列石は深い山の中にあるので、海まではとても歩いていけない場所です。だから物々交換などによって食材なども運ばれてくると思うのですが、人骨の同位体分析などによる食物の分析をしていただくと、ほとんど山の中に海産物が入ってきていな

い。縄文時代後期ですから取掛西貝塚と時代は違いますが、もともと海の資源がない地域ではどうやって味をつけたのだろうかということを今、研究しています。塩もないですから、実際に食材にどうやって味をつけるかという実験もやっています。結局、海の資源の何を採ってどうやって食べたのかということはまだわかっていない。その辺が面白いところで、海は楽だなあと思いました。塩があるし、魚も採れる。資源利用のし易さという差もあるので、科学的にきちんと証明していくと面白いと思います。

小川委員：山だったらキノコじゃないですか。キノコと貝が混じれば相当美味しいです。

秋山委員：食文化までもっていくと、みんな興味を持つと思います。

小川委員：そういう話を子供たちにすれば、興味を持つと思います。

秋山委員：大湯では体験ツアーをやっています。土器で煮ることができるということを本物の土器でやると、複製品の土器ですが、それで煮炊きをするとみなさん驚きます。

小川委員：さきほど秋山委員がおっしゃったように、子供の体験が、一番効果があると思います。子どもの自由研究などでそういう体験をさせれば、10年、20年後に育つので、子供への周知・活用に力を注ぐのがよいと思います。

(4) 議事2 その他

阿部委員長：ありがとうございました。議論に火がついてしまいましたけれども、そろそろ議論を閉めたいと思います。この委員会は2回目ですが、僕が目指したいのは子どもたちに取掛西貝塚に対して興味を持ってもらうことです。そして子どもたちにどういう風に興味を持ってもらうかという面で、それを考えるにはまずは、委員の先生方に取掛西貝塚に対して更に興味を持ってもらうことが一番だと考えています。僕らが調べて知るだけなら、子どもへはただこれをやりなさいで終わってしまうのですが、僕らがどれだけ興味を深められるかという姿勢が子供たちにも徐々に反映していくはずなので、そういう意味で今日、いろいろな方々からさまざまなご意見をいただけたのは非常によかったなと思います。他に先生方からご質問、ご意見はありますか。それでは、最後に事務局から何か連絡事項があればお願いします。

事務局：次回3回目の回ですけれども、9月ぐらいに行いたいと考えておりまして、日程調整につきましては改めてご連絡を差し上げたいと思います。

朝倉委員：今日のスライド資料をメールで送っていただけたらと思います。

阿部委員長：配布資料については、次回から映像に映したものと同じプリントをいただけたらと思います。見ながらメモがとれるので。よろしくお願いします。

事務局：わかりました。

小川委員：アンケートですが、それは市がやるのですか？

事務局：市が行います。

小川委員：町会単位でどうこうということではないのですね。

事務局：そのとおりです。

野田委員：地域住民のアンケートも同じですか。

事務局：そのとおりです。

阿部委員長：よろしいでしょうか。以上をもちまして第2回史跡取掛西貝塚保存活用計画策定委員会会議を閉会します。オンラインではなくて対面で行えると、こんなに生産的な議論ができるのだなと思いました。次回もよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

一同： ありがとうございました。

9. 問い合わせ先

船橋市教育委員会 生涯学習部文化課 文化財保護係 047-436-2887